# そぞろごと

與謝野晶子

青空文庫

○

山の動く日來る。
かく云へども人われを信ぜじ。
山は姑く眠りしのみ。
その昔に於て
山は皆火に燃えて動きしものを。
されど、そは信ぜずともよし。
人よ、ああ、唯これを信ぜよ。
すべて眠りし女今ぞ目覺めて動くなる。

○

一人稱にてのみ物書かばや。
われは女ぞ。
一人稱にてのみ物書かばや。
われは。われは。

○

額にも肩にも
わが髪ぞほつるる。
しをたれて湯瀧に打たるるこころもち。
ほとつくため息は火の如く且つ狂ほし。
かかること知らぬ男。
われを褒め、やがてまた譏るらん。

○

われは愛づ。新しき薄手の玻璃の鉢を。
水もこれに湛ふれば涙と流れ。
花もこれに投げ入るれば火とぞ燃ゆる。
愁ふるは、若し粗忽なる男の手に碎け去らば。——
素燒の土器より更に脆く、かよわく。

○

青く、且つ白く、
剃刀の刃のこころよきかな。
暑き草いきれにきりぎりす啼き、
ハモニカを近所の下宿に吹くは懶けれども。
わが油じみし櫛笥の底をかき探れば、
陸奥紙に包まれし細身の剃刀こそ出づるなれ。

○

にがきか、からきか、煙草の味は、
煙草の味は云ひがたし。
甘しと云はば、かの粗忽者

砂糖の如く甘しとや思はん。
われは近頃煙草を喫み習へど、
喫むことを人に秘めぬ。
蔭口に男に似ると云はるるもよし。
唯おそる。かの粗忽者こそいと多なれ。

○

「鞭を忘るな」と
ツアラツストラは云ひけり。
女こそ牛なれ、また羊なれ。
附け足して我は云はまし。
「野に放てよ。」

○

わが祖母の母はわが知らぬ人なれど、
すべてに華奢を好みしとよ。
水晶の珠數にも倦き、珊瑚の珠數にも倦き、
この青玉の珠數を爪繰りしとよ。
我はこの青玉の珠數を解して、
貧しさに與ふべき玩具なきまま、
一つ一つ兒等の手に置くなり。

○

わが歌の短ければ、
言葉を省くと人おもへり。
わが歌に省くべきもの無かりき。
また何を附け足さん。
わが心は魚ならねば鰓を有たず、
ただ一息にこそ歌ふなれ。

○

すいつちよよ、すいつちよよ。
初秋の小き篳篥を吹くすいつちよよ。
蚊帳にとまれるすいつちよよ。
汝が聲に青き蚊帳は更に青し。
すいつちよよ、なぜに聲をば途切すぞ。
初秋の夜の蚊帳は水銀の如く冷きを。
すいつちよよ、すいつちよ。

○

油蝉のじじ、じじと啼くは、
アルボオス石鹸の泡なり、
慳貪なる男の方形に開く大口なり、
手握みの二錢銅貨なり、
近頃の藝術の批評なり、

誇りかに語るかの若き人等の戀なり。

○

夏の夜のどしや降の雨、
わが家は泥田の底となるらん。
柱みな草の如く撓み、
そを傳ふ雨漏の水は蛇の如し。
寢汗の香、かなしさよ。よわき子の齒ぎしり。
青き蚊帳は蛙の喉の如く脹れ、
肩なる髮は鹿子菜の如く戰ぐ。
この中に青白きわが顏こそ
芥に流れて寄れる月見草なれ。

# 青空文庫情報

底本：「青鞜　第一巻第一號」青鞜社
　　1911（明治44）年9月1日発行
初出：「青鞜　第一巻第一號」青鞜社
　　1911（明治44）年9月1日発行
入力：富田晶子
校正：雪森
2019年4月26日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（https://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# そぞろごと

與謝野晶子

2026年10月1日　第二版

## 奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/